

台湾太陽花学運(ひまわり学生運動)

◆台湾の「ひまわり学生運動」…野いちごが鋼の強さになった。

台湾で突如、吹き荒れたような「太陽花学運(ひまわり学生運動)」は立法院(国会に相当)の議場を占拠した。乱闘国会で有名な台湾だが、学生の議場占拠は前代未聞。国際的にも注目を集めた。議場占拠は24日間も続き、50万人デモまで敢行し、馬英九政権が進めている中国との「サービス貿易協定」の発効にストップをかけ、立法院での再審議に持ち込むなど一定の成果を上げた。その主役は傷つきやすく壊れやすいため野草莓(いちご)と呼ばれた若者たち。なぜそんな弱々しい野いちごたちが政権を揺るがす鋼(はがね)のような強さを持つひまわりに変身したのか。

◆計画的でなかった議場占拠

前代未聞の議場占拠は事前に計画されたものではなかった。3月17日、立法院の委員会審議が国民党によって一方的に打ち切れ、サービス貿易協定が院会(本会議)に送付されたのを知った学生たちが、18日、立法院前に続々と集まり始めた。

サービス貿易協定は中国と台湾が相互にサービス産業の市場を開放するという取り決めで、昨年6月に調印され、立法院の承認を得て発効する運びになっていた。台湾のサービス産業の担い手は90%以上が中小企業や零細企業。そこへ資金力では格段の差がある中国資本が入ってきたら、台湾のサービス産業はひとたまりもない。理髪業、クリーニング業、美容院などの団体がかねて反対運動を繰り返して、一方で銀行などは中国市場で支店開設など業務拡大が見込めるから賛成論を唱えていた。

学生たちは主に中小、零細企業の側に立って支援活動をしてきた。立法院の審議は民進党など野党が反対してはいたが、結局は数で圧倒的な与党、国民党の前に立ちほだかることはできない。最後は議長席を占拠するなどお得意の手段もとったが、委員会審議に形式的には半年以上の時間をかけており、国民党は審議打ち切りの強硬手段をとり、院会(本会議)に送ったのだった。

国民党のこの措置は民主主義を踏みにじるものだと学生たちは怒って、議場占拠に突っ走ったのだ。しかし議場占拠は計画されたものではなかった。18日、立法院前で抗議集会を開いたが、埒が開かず、夜になって一部学生が突然、突入を図り、あれよあれよという間に議場占拠してしまった。立法院には常に警備の警官隊がつめており、この日は学生ら抗議集会もあるというのでいつもより多い警官隊がいたが、突然の学生たちの行動に虚を衝かれたのだろうか。

◆市民の支持、支援が力に

国民党側からは、民進党が後ろで学生を操って占拠したという非難もあったが、まったくの的外れだ。議場には本会議開催を阻止するため野党、民進党などの立法委員(議員)もいたが、「なにが起きたか分からないうちに占拠された」と話す。なによりも占拠した学生たちもその後どう

するかまで明確な計画はなかった。「外部から何らかの形で食料などを入手するから頑張れ」と叫んでいるリーダーの姿もあった。

そんな素人集団にみえる学生たちが4月10日夜までの約24日間も議場を占拠できたのは、ひとえに市民の支援があったからだ。占拠直後、すでに周辺には支援物資を運ぶ市民が続々と詰めかけ、周辺道路に溢れた。その数は1000人とも2000人ともいわれた。そこまで増えると、警察もうかつに手出しはできない。加えて立法院の構内での警察の行動は立法院長の指示が必要。その院長、王金平氏は無言。指揮系統の乱れも警察の学生排除活動を消極的にした。

◆規律正しい24日間の占拠

素人集団にもみえた学生たちだったが、議場占拠という強硬手段の一方で、占拠活動は極めて規律正しく行っていた。議場の入り口は椅子などを積み上げ、バリケードを築いており、議席のマイクなども壊れていたが、議場内は比較的整然としていた。議長席の右側には医師団が座り、その前には法律顧問団の席。議長席左側には少し遅れてから「通訳団」の席もできていた。外国メディアの取材に応じるため、スポークスマンも置いた。

立法院の外の周辺道路は1000人を超す学生、さらには市民がダンボールを敷いて寝泊りを始めた。最盛時、2000人は超えていた。交通は遮断。後に寝袋やベッド代わりにスノコも増え、さらにテントが並んだ。通行人が通れるようテープを貼って通路を確保。トイレのバスも数台用意された。学生は交代でゴミ袋を持って回り、ゴミ集めをし、そのゴミは分別収集していた。

市民からは続々と食糧、飲料の支援。それを学生が配って歩く。いまだきの学生にとっては命の次ぎぐらいに大事な携帯電話の充電のために立法院から電線を引き、充電ステーションを開設し、無料で充電サービスをしていた。医学部の学生もいるので、彼らが中心になってテントの医療施設もできた。大学生の中には医学部もいれば、工学部もいるし、体育会系もいる。たいてのことは学生ら自分の手でできる。

トラブル防止のため「糾察」の腕章をつけた学生たちが定期的に見回りし、治安維持に努めていた。暴力団系と思しきチンピラが夜中にスクーターで学生たちが寝ている近くを猛スピードで何台も走り回る挑発行為もあった。バンブーマフィア(竹連幫)のボスが総勢1000人以上を引き連れ、「学生と対話」と称して押しかけるデモをかけてきたこともあっただけに、糾察隊の役割は重要だった。

◆「運動」経験豊富な学生たち

計画的ではなかった議場占拠だが、その後の活動は極めて統制がとれ、遅れてくる学生たちもすんなりと支援の輪に入れたし、だからこそ市民も好感をもって学生の活動を見つめ、支援した。わずか3日前に決めた3月30日のデモは10万人を目標にしたが、目標をはるかに超える50万人が参加した。その多くが学生たちの言動に共鳴した市民で、しかもデモは初めて参加したという人も多かった。そこまで市民の支持を得られたのは学生たちの行動が平和的で整然とし、十分な「経験」があったからだ。

話は2008年11月の「野草莓学運(野莓学生運動)」に遡る。この年、総統選挙で中国の力を恃んで台湾経済をよくすると訴えた国民党の馬英九主席が圧勝し、8年ぶりに政権を奪回、公約通り中国との関係拡大路線を推し進めた。6月に中国、台湾の窓口機関、海峡兩岸関係協会の陳雲林会長と海峡交流基金の江丙坤董事長が北京で会い、15年ぶりの兩岸トップ会談を実施、さらに11月には台北で2回目のトップ会談を実施した。

急激な傾中路線を危惧する学生や市民が陳会長の訪台時に台湾の中華民国旗を掲げて抗議デモし、その国旗を警察が取り上げ、市民を排除する過剰取り締まりに抗議して学生が、行政院前で座り込みデモをした。座り込みは排除され、その後、学生は場所を中正紀念堂に移して座り込みを続けた。このときの学生運動が「野草莓学運」(野いちご学生運動)で、当時の大学生は「傷つきやすく壊れやすい」ということで、野いちごと呼ばれた。

座り込みは約2ヶ月続き、寒空の下で学生たちはテントを張って野宿。夜は集会をし、次々に大学教師らも支援のスピーチをしていた。その姿を見た市民たちが次々に食糧や飲料を差し入れし、義捐金の申し出も相次いだ。学生たちはそれに対し領収書の発行もした。平日は100人足らずの座り込みだったが、一方でインターネットに毎日のスピーチ予定などを掲載、さらに実況中継もした。それを見て地方から応援に駆けつける学生や市民の支援も増え、週末は数百人規模の集会になった

◆野いちご運動から学生リーダーが育った

野いちご運動は大きな成果は得られなかった。しかし、この運動で多くの学生が学生運動の洗礼を受け、以後、学生たちはそれぞれの決意を胸に様々な社会の矛盾に正面から立ち向かい始めたのである。これが野いちご運動の最大の成果であり、その流れが今回のひまわり運動にもなっている。議場占拠は突然の出来事のようにも取られているが、実は野草莓以来、育成され、堅固になってきた学生運動の大きな流れの中で生まれたのである。

ひまわりのリーダーの一人林飛帆さんは野いちご時代は台湾大学入学早々で、それでも野いちご運動に参加していた。2011年、中国の複数の都市で同時に共産党独裁に反対するデモをしようとした「中国版茉莉花(ジャズミン)革命」に呼応して中正紀念堂で行われたデモにも参加している。デモ隊は十数人でしかなかったが、天安門事件の時の学生リーダーの一人、ウーアルカイシさんも参加していた。

もう一人のリーダー、陳為廷さんは当時はまだ高校生だったが、2010年から始まった苗栗県大埔の強制立ち退き反対の住民運動に参加した。事件は経済開発区の拡大でエリアに組み込まれた商店などが、立ち退きを迫られ、反対する住民を学生が支援、陳さんはその一人だった。結局、住民や学生が泣いて見守る中、パワーショベルが商店をぶち壊し、それが全台湾に生中継された。その中で、陳さんは苗栗県長に靴を投げつけ、一躍、名が知られた。

海外にはほとんど知られていないが、実は台湾では野いちご以降、苗栗県大埔事件以外にも多くの住民、市民運動が起きており、その中心に学生がいた。2012年9月の旺旺集団によるメディア独占反対運動。これは学生主催で当初、2000人規模といていたが、デモが始まると参加者が増え、1万人に達した。今回の50万人デモと似たような状況で、反独占の賛同者がそれだけ多かったということだ。去年の軍隊での虐殺事件では政府の対応の不味さもあり、抗議のデモは25万人に上った。台北市内では苗栗県大埔事件のような住宅の強制立ち退きに関わる住民運動が相次いで起き、日本時代に造られた監獄があった華光地区では、遺跡保存で成果があった。

◆脱政党の社会運動の主力に学生たち

最大の市民運動は反核運動だろう。とくに「フクシマ」以後、台湾の反原発運動は大きな広がりをみせており、毎年行われるデモはいつも10万人を超す規模になる。その主役は市民団体で、学生も反原発には欠かせない主力軍のひとつだ。台湾の反原発運動の高まりは一つにはフクシマ以後の危機感があり、それには政党色が薄い。

台湾の原発立地は日本に似ており、しかもいずれも都市部に近い。台北市内から最短で 20 キロというもある。フクシマの惨状をテレビを通じて見ているだけに台湾の住民の不安感は大い。しかも経費が巨額に上り、一部では汚職のうわささえある第四原発を建設中。その周辺の地下には火山帯が走る。第四原発建設中止を求める住民の声は大きく、そこにはイデオロギーの問題はない。

台湾のデモには政党色がつき物だ。その根底は「統一か独立か」という中国問題がある。党旗の色から統一志向の国民党支持は藍、独立志向の民進党支持は緑と色分けされ、「統独論争」、「藍緑対立」などと呼ばれて来た。この藍緑の対立は、結局はそれぞれの党の利益確保の対立になる嫌いがあり、一般市民は飽き飽きしていた。反原発も第四原発建設中止も藍緑の問題ではないし、統一独立の問題でもない。住民の生活そのものに関わる問題。ということでフクシマ以後の反原発運動は脱政党を明確にしてきた。デモに政党の参加は歓迎するが、壇上で演説はさせない。それが多くの市民の共感を得て、デモの参加者が増えた。

野いちご以来の学生運動も統独論争のイデオロギーを超え、政党色を脱して市民の共感を得た。議場占拠が続いていた立法院周辺には多くの市民団体や政党も駆けつけたが、学生側は政治家の名を書いた幟(のぼり)や横断幕は禁止。今年 11 月には統一地方選挙があるので立候補予定者にはひまわり運動は宣伝の絶好の場だったが、政党も学生側の要請を受け入れ、政治家の幟や宣伝カーは一切なかった。

◆「将来はますます悪くなる」と絶望の若者たち

ところで学生運動のテーマといえどこの国でも「天下国家」が定番だが、なぜ台湾の学生は住民運動のような身近な問題に目を向けたのだろうか。「今周刊」(No902)が世新大学と 20～35 歳までの若者を対象に調査した興味深いデータがある。

「自分の未来をどう思いますか?」と聞くと、61・5%が「希望はもってない」。「あなたの人生は両親と比べてどうですか?」には 62・9%が「両親の時代より悪い」と答えている。「今後 10 年で台湾社会はどう変わると思いますか?」には 64・4%が「ますます悪くなる」。絶望の世代といったらいいのだろうか、なんとも悲観的で暗い。

なぜそんなに悲観的なのか。具体的な問題を複数回答で聞くと、第1は 16 年前と変わらない低賃金(79・74%)、第2は一生かかっても買えないほど高騰しているマンション価格、第3は 20 歳代の 12%台という高い失業率。馬総統の前の民進党の陳水扁時代は 10%台だった。ひと言でいえば経済不振だ。

馬英九総統は中国との緊密化でそんな経済低迷から脱しようと言って政権をとると、中国人の台湾観光を自由化、投資も規制緩和し、直行便を認めて中国との行き来を大幅に拡大した。さらに一歩進んで中国・台湾両岸を一つの共同市場にする「一中市場」構想を打ち出し、その具体化の第一歩として双方の関税を最終的にはゼロにする「経済協力枠組み協定」(ECFA)を 2010 年に締結した。サービス貿易協定はその第二段階で、馬英九総統は年末には ECFA を拡大深化させた「貨物貿易協定」を締結する方針だった。

◆若者ほど中国化を懸念、独立意識高い

しかし、台湾は中国人の姿が増えるばかりで、経済は一向に好転しない。このままサービス貿易協定を含め中国傾斜を強めれば、香港のように中国企業、中国人ビジネスマン、さらには一般中国人が台湾に溢れ、台湾は中国化し、やがて台湾は中国に呑み込まれてしまうという懸念も広がる。

とくにその懸念は若者に強い。民間のシンクタンク、新台湾国際智庫が今年3月中旬から下旬にかけて行った調査では、そのせいか若者ほど台湾の独立志向が強いという結果になっている。

調査では過半数の台湾市民は現状維持を選ぶ。独立に走れば、中国が武力行使も辞さない姿勢で台湾を抑えにかかると思うからだ。だが、現状維持できなくなったとき、どうするかを問うと、62・7%が独立を選び、中国との統一を望むのは20・4%。独立を選んだ人を年代別に見ると、最も高いのは20代の73・6%、次が30代の68・3%、ついで70歳以上の61・3%だった。

一般的には李登輝元総統はじめとする日本統治を経験した日本語世代といわれる高齢者ほど独立意識が高いといわれるが、実は若者のほうが独立意識は強いのだ。この若者たちは民主化が始まった李登輝総統時代以後に教育を受けている。しかも海外の情報を比較的自由に入手できるようになったし、海外にも自由に行けるようになった。その海外で中国人と接触もしただろうし、それどころが中国に行って現実の中国もみている。その結果の独立意識なのである。

◆明日の光明(ひまわり)を手に

台湾の将来に希望が持てないといっても、多くの若者はこの台湾で生きてゆくしかない。中国を当てにして経済成長を求める馬政権の手法は何の効果もないどころか中国化の懸念が膨らむ。やがては中国に飲み込まれるリスクが高まるばかり。ならば既存の政治に頼らず、市民と手を携えて自分たちの手で身近な問題から一つ一つ解決し、明日への希望を取り戻そうというのがひまわり世代の学生たちなのである。

サービス貿易協定については撤回を目標に掲げるが、同時に中国との協定についての監督条例を法制化し、サービス貿易協定も条例の規定に従って審査して、成否を決めると主張する。学生たちが主張する監督条例は中華民国と中華人民共和国が結ぶ協定についての監督条例である。馬政権のいう条例は大陸地区と台湾地区の協定についての条例。つまり学生たちは中国と台湾を国と国の関係としているのに対し、馬政権は一つの中国の中の地区と地区の関係だ。ここにも学生たちの独立意識が浮かんでいる。

それだけに議場占拠で監督条例の法制化を約束させたとはいえ、今後、学生たちの主張通りに進むかどうかは疑問。もし学生のたち主張を無視、軽視すればひまわり世代は「今度は総統府を占拠する」と息巻く。「今後10年、台湾はますます悪くなる」という悲観論から明日の光明を象徴する太陽花(ひまわり)を手にして議場占拠したひまわり世代の学生たち。その姿に多くの市民が共鳴し、時代を動かす潮流となったが、その成果はまだほんの一部しか得られていない。

補記

◆2008年に誕生した国民党の馬英のこと

警官隊も手出しをためらった。3日前に決めた3月30日のデモは10万人を目標にしたが、目標をはるかに超える50万人。学生たちの言動に共鳴した市民がそれだけ多かった。幹部は社会運動の経験者の綿密な計画の下に実施されたわけではなかったが、行動は規律があり、統制がとれていた。それは学生たちには十分な「経験」があったからだ。素人集団に見えた学生たちだが、幹部学生の多くは実は数々の住民運動、社会運動を体験してきた。

ひまわりのリーダー格の林飛帆さんは台湾大学に入学間もない2008年暮れ「野草莓(のいちご)学運」に参加、学生運動の洗礼を受けている。この年、馬英九政権が誕生し、傾中路線が

始まり、中国と台湾の兩岸トップ会談が行われた際のデモへの過剰警備に抗議して、最初は行政院(内閣に相当)、後に中正紀念堂に学生らが約2ヶ月、座り込んだ。

当時、台湾の学生は「傷つきやすく壊れやすい」ということで「野草莓」と呼ばれたが、座り込みは野草莓学運と名づけられた。この時、すでにひまわり運動の萌芽がある。学生たちはネットをフルに活用、抗議を呼びかけ、週末には南部からも学生が駆けつけた。市民たちは食糧、飲料を差し入れ、市民からの寄付金に学生は領収書を出していた。

以後、学生たちは社会の矛盾に正面から立ち向かい始めたのである。あまり知られていないが、林さんは2011年2月、中国各地で中国共産党の独裁反対の声を上げた中国版ジャスミン(茉莉花)革命に呼応した中正紀念堂のデモにも参加していた。もう一人のリーダー、陳為廷さんは2010年からの苗栗県大埔の強制立ち退き反対の住民運動で苗栗県の県長に靴を投げたことでも知られる。

一般社団法人 アジア文化研究学会 研究員 迫田 勝敏